

出題意図

問1 基本的な英語の理解と文章の読解力を問う。

問2 英文の理解と意味の読み取り、特に unmeasured factors を科学的モデルにおける概念として読み取れるかどうかを問う。

問3 人を対象とした科学研究としての Randomized Controlled Trial(RCT)について基礎知識を持っているかどうか、および倫理的配慮について理解しているかどうかを問う。

問4 英文の理解と読み取り、科学における因果関係の立証についての理解を問う。

問5 英文を理解するにあたって、科学研究における研究デザインとして実験者のバイアスを回避する手続きを理解しているかどうかを問う。

問6 英文を理解するにあたって、ケース研究における後ろ向き研究(retrospective)の限界を理解しているかどうかを問う。

解答例

問1 下線部(1)の文章の内容に相当する部分を抜き出し、英語で答えなさい。

Does smoking cause lung cancer?

問2 下線部(2)を日本語に訳しなさい。

ニコチンへの欲求と肺がんの両方の原因となる未測定因子があるのではないか

問3 下線部(3)の文章の理由を日本語で答えなさい。

ランダムに人を選んで、健康を害する可能性のある喫煙を何十年も続けさせ、彼らが30年後に肺がんになるかどうかを確かめるような実験は倫理的に不可能であるから。

問4 下線部(4)および(5)をそれぞれ日本語に訳しなさい。

(4)

因果関係は統計学的傾向の定性的パターンに基づいて判断される。

(5)

すでにかんと診断された患者たちと、健康なボランティアからなる対照群とを比較する

問5 下線部(6)を実現するために、どのような方法がとられたかを日本語で説明しなさい。

インタビュー調査を行う際、インタビュアーには、誰がかん患者で誰が対照群であるかを教えない。

問6 下線部(7)において Doll と Hill の case-control 研究の問題として挙げられている内容を本文に即して日本語で説明しなさい。

彼らの研究デザインは「後ろ向き研究」であり、すでにかんにかかっている患者の過去を振り返って原因を探ろうとするものであるから、データが示すのはがん患者が過去に喫煙者であった確率であって、喫煙者が将来がんを発症する確率はわからない。

出題意図

- ・心理医療科学研究科で研究を進めるには、各専門分野の文献を精読する必要がある。加えて、英語論文に示された概念の本質を掴み、読解する力も求められる。
- ・本問で取り上げた DSM-V-TR は精神医学、精神保健、リハビリテーション学などにおける必須文献である。本研究科を構成する6つの専修のいずれも受験生であっても十分に読みこなせてほしいレベルの英文であり、博士前期課程で研究を進めるための必要な英語読解力を問うている。

解答例・採点基準

（問題1、2、3ともに共通）

- ・各文が指定された文字数で、一部または全文が理解できているか、その上で適切に和訳できているかなど博士前期課程の院生として必要な英文読解力を有しているかを評価、採点している。

問1

【出題意図】

心理学医療科学研究を理解するうえで必要となる基礎的な統計概念および研究方法上の概念について、正確に理解しているかを問う問題である。分散、独立変数、従属変数の意味を、心理学医療科学研究の文脈に即して簡潔に説明できるかを評価する。

【解答例】

- (1) 分散とは、データのばらつきの大きさを表す統計量である。各データが平均値からどの程度離れているかを二乗し、その平均を求めることで算出される。心理学医療科学研究では、参加者間の個人差、測定値のばらつき、または実験条件による変動の大きさを把握するために用いられる。分散が大きいほど、データが平均値の周りに広く散らばっていることを意味する。
- (2) 独立変数とは、研究において従属変数に影響を与えると想定される変数、または研究者が操作・分類する変数である。従属変数とは、独立変数との関係を調べるために測定される結果側の変数である。たとえば、「ストレスレベルが作業効率に与える影響」を調べる研究では、ストレスレベルが独立変数、作業効率が従属変数となる。

〈採点基準・評価ポイント〉

- (1) 分散がデータのばらつきを表す統計量であることを理解し、心理医療科学研究の文脈で説明できているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
 - ・分散がデータのばらつきを表す指標であることを説明している。
 - ・平均値からのずれを二乗して平均するという考え方を説明している。
 - ・個人差、測定値のばらつき、条件間の変動などと関連づけて説明している。
 - ・分散が大きい場合の意味を適切に説明している。
- (2) 独立変数と従属変数の意味を区別し、研究における両者の関係を説明できているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
 - ・独立変数が、従属変数に影響を与えると想定される変数、または研究者が操作・分類する変数であることを説明している。
 - ・従属変数が、独立変数との関係を調べるために測定される結果側の変数であることを説明している。
 - ・独立変数と従属変数の関係を適切に区別している。
 - ・具体例を用いて説明している。

問2

【出題意図】

治療前後の測定値を比較する具体的な研究場面において、データの対応関係を踏まえて適切な t 検定を選択できるかを問う問題である。さらに、p 値と有意水準に基づき、統計的有意性の有無を適切に判断し、結果を解釈できるかを評価する。

【解答例】

- (1) この場合は、「対応のある t 検定」を用いるべきである。

理由:本研究では、同じ 20 人の実験参加者について、CBT の実施前と実施後の 2 時点で不安スコアを測定している。したがって、治療前のスコアと治療後のスコアは、別々の参加者から得られた独立したデータではなく、同

一参加者から得られた対応のあるデータである。対応のある t 検定は、このように同じ対象者から 2 条件または 2 時点で得られた測定値を比較し、その差の平均が統計的に有意であるかを検討するために用いられる。したがって、本問では対応のない t 検定ではなく、対応のある t 検定を選択するのが適切である。

- (2) p 値が 0.03 であるとは、帰無仮説が正しいと仮定した場合に、今回観察された差と同程度、またはそれ以上の大きさの差が偶然に得られる確率が 3%であることを意味する。有意水準を 5% ($\alpha = 0.05$) とすると、 $p = 0.03$ は 0.05 より小さいため、帰無仮説を棄却する。したがって、治療前後の不安スコアには統計的に有意な差が認められたと解釈できる。なお、治療後の平均不安スコアが治療前より低い場合には、CBT によって不安スコアが有意に低下したと解釈できる。

〈採点基準・評価ポイント〉

- (1) 治療前後の測定値が同一参加者から得られた対応のあるデータであることを踏まえ、適切な検定法を選択できているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
- ・対応のある t 検定を選択している。
 - ・同じ参加者の治療前後データであることを説明している。
 - ・治療前後の測定値に対応関係があることを説明している。
 - ・対応のない t 検定ではなく、対応のある t 検定を用いる理由を説明している。
 - ・対応のある t 検定が、同一対象者における 2 時点または 2 条件の差を検討する方法であることを理解している。
- (2) p 値と有意水準の関係を理解し、検定結果を統計的に適切に解釈できているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
- ・p 値の意味をおおむね適切に説明している。
 - ・ $p = 0.03$ と有意水準 5% を比較して判断している。
 - ・ $p < 0.05$ であるため、帰無仮説を棄却すると説明している。
 - ・治療前後の不安スコアに統計的に有意な差があると解釈している。
 - ・治療後の平均不安スコアが治療前より低い場合に、有意に低下したと解釈できることを説明している。

問 3

【出題意図】

複数群の平均値を比較するための一要因分散分析について、その基本的な考え方を理解しているかを問う問題である。群間分散と群内分散の意味、F 値による検定の考え方、および主効果が認められた後に行う多重比較の必要性と代表的な方法について説明できるかを評価する。

【解答例】

- (1) 一要因分散分析(一元配置分散分析)は、1 つの要因によって分けられた 3 つ以上の群の平均値に、統計的に有意な差があるかどうかを検討するための方法である。一要因分散分析では、データ全体のばらつきを、群間分散と群内分散に分けて考える。群間分散とは、各群の平均値が全体の平均値からどの程度離れているかを表す変動であり、要因による効果を反映すると考えられる。一方、群内分散とは、同じ群に属する個々のデータが、その群の平均値からどの程度ばらついていているかを表す変動であり、個人差や測定誤差などの偶然変動を反映すると考えられる。一要因分散分析では、群間の変動を自由度で割った群間平均平方と、群内の変動を自由度で割った群内平均平方を求め、その比である F 値を用いて検定を行う。F 値が十分に大きい場合には、群の平均値がすべて等しいという帰無仮説を棄却し、要因による群平均の違いが統計的に示されたと解釈する。

(2) 解答例①: 多重比較法の一つに、Bonferroni (ボンフェローニ) 法がある。Bonferroni 法は、複数の群間比較を行う際に、第 1 種の過誤、すなわち本来は差がないにもかかわらず誤って有意差があると判断してしまう確率を抑えるための方法である。この方法では、全体として設定した有意水準を比較回数で割り、各比較における有意水準をより厳しく設定する。たとえば、全体の有意水準を 0.05 とし、10 通りの比較を行う場合、各比較の有意水準は $0.05 \div 10 = 0.005$ となる。このように有意水準を調整することで、複数の検定を行うことによって偶然に有意差が出やすくなる問題を抑えることができる。Bonferroni 法は比較的簡便で理解しやすい方法であり、心理学研究においても広く用いられる。ただし、比較回数が多い場合には有意差が検出されにくくなるため、やや保守的な方法である。

解答例②: 多重比較法の一つに Tukey 法がある。Tukey 法では、すべての群のペアについて平均値の差を比較し、その差が統計的に有意であるかどうかを検定する。Tukey 法では、分散分析で得られる誤差分散と各群のサンプル数に基づいて群間差を評価し、スチューデント化範囲分布、すなわち q 分布を用いて有意性を判断する。Tukey 法では、Bonferroni 法のように各比較の有意水準を単純に比較回数で割るのではなく、すべてのペア比較を同時に考慮した q 分布に基づく基準を用いることで、ファミリー・ワイズ・エラー率を統制する。そのため、全ての群間比較を行いたい場合に適した多重比較法である。

〈採点基準・評価ポイント〉

- (1) 一要因分散分析の目的、群間分散と群内分散の意味、 F 値による検定の考え方を理解しているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
- ・一要因分散分析が、3 つ以上の群の平均値を比較する方法であることを説明している。
 - ・群間分散が、群平均間のばらつきや要因に関連する変動を表すことを説明している。
 - ・群内分散が、同じ群内の個人差や測定誤差などの偶然変動を表すことを説明している。
 - ・群間平均平方と群内平均平方の比である F 値に基づいて検定することを説明している。
 - ・ F 値が十分に大きい場合、群平均がすべて等しいという帰無仮説を棄却すると説明している。
 - ・分散分析の結果だけでは、具体的にどの群間に差があるかまでは判断できないことを理解している。
- (2) 分散分析後の多重比較の目的と、代表的な多重比較法の基本的な考え方を説明できているかを評価する。主な評価ポイントは以下の通りである。
- ・多重比較法の名称を一つ挙げている。
 - ・多重比較が、主効果後にどの群間に差があるかを検討するための方法であることを説明している。
 - ・複数の比較によって第 1 種の過誤が増加する問題を説明している。
 - ・有意水準の調整、またはファミリー・ワイズ・エラー率の統制について説明している。
 - ・Bonferroni 法を挙げた場合は、全体の有意水準を比較回数で割る方法であることを説明している。
 - ・Tukey 法を挙げた場合は、すべてのペア比較を対象とし、 q 分布に基づいてファミリー・ワイズ・エラー率を統制する方法であることを説明している。

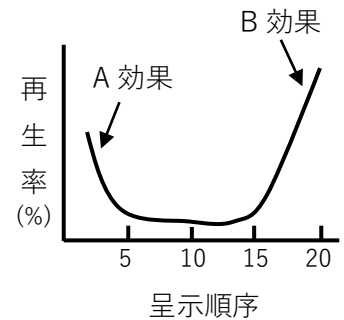
【出題意図】

問1は記憶の分野で有名な実験であり、基礎的な内容である。まず、知識の習熟度を確認すること、さらに研究を理解した上で応用するという研究の流れを理解しているか確認することを意図した。

問2では心のはたらきの基盤となる中枢神経系、末梢神経系の基礎知識を有しているのか確かめることを意図した。

【解答・解答例】

問1. 20個の単語を3秒に1個の間隔で呈示し、単語呈示直後に自由再生を求める記憶実験を行った。この実験結果から、単語が呈示された順序によって再生率が異なることが明らかになった。右図はこの実験結果を示す。



(1) 図に描かれている曲線の名称を答えなさい。

解答：系列位置曲線

(2) 図中のA効果、B効果の名称を答えなさい。

解答：A=初頭効果 B=新近性効果

(3) A効果、B効果が認められた理由を、二重貯蔵モデル (Atkinson & Shiffrin, 1971) に基づいて説明しなさい。

解答例：系列の初めの項目は、リハーサルを繰り返し、長期記憶に転送され貯蔵される。長期記憶から検索できたため、再生率が高くなった。系列の最後の方の項目は、呈示後すぐに報告を求められるため、短期記憶に残っている可能性が高い。短期記憶から検索できたため、再生率が高くなった。

(4) A効果は残し、B効果を消失させるためには、この記憶実験にどのような手続きを加えたらよいだろうか。考えられる実験手続き、及びその手続きを加える理由を説明しなさい。

解答例：

実験手続き：全ての情報の呈示後、30秒間の暗算課題を行い、その後に再生テストをする。

理由：長期記憶から検索された結果である初頭効果は暗算課題の影響を受けないが、短期記憶から検索された結果である新近性効果は、短期記憶の貯蔵時間を超え、またリハーサルもできないため長期記憶にも転送できず、結果として再生率は下がる。

問2. 次のa~dの文が正しければ○を、間違っていれば×を解答欄に記入しなさい。8点 (各2点)

- a. 樹状突起は細胞体から伸びる1本の突起で、受け取った情報を次のニューロンに伝達する役割を持つ。
- b. 生体のホメオスタシス機能を担うのは体性神経系である。
- c. 跳躍伝導とは、ニューロン間の情報伝達において、送り手ニューロンと受け手ニューロンの間の情報伝達のことを指す。
- d. 大脳は大脳縦裂により左半球と右半球に分けられる。

解答：a=× b=× c=× d=○

問1.

<出題意図>

Aさんの不登校状態に対する見立てと、見立てに基づいてAさんだけでなく家族を含めた家族療法的支援を検討できるかを問うている。見立てにおいては、クライアントの主訴と行動面を観察し、その背景には学校環境や対人関係、学業への不安などがある可能性を踏まえているか、そして認知・感情面の特徴、家族関係の影響、発達段階の関連など、多面的・複層的に検討することが重要である。本設問では知識を問うだけでなく、少ない情報ではあるがそこからクライアントおよび家族の心理的困難さとその背景を推察し、さらに論理的に解答できているかを確認することも意図している。

<解答例>

(1)

Aさんは学校に行けなくなっていることから、不登校の状態にあると考えられる。また、「自分はダメな人間だ」と繰り返す発言から、自己評価の低下や抑うつ傾向が示唆される。家庭内では母親の否定的な言葉や父親の無関心が見られ、家族関係の不和や支援の不足が心理的問題の背景にある可能性がある。臨床心理学的には、個人の認知・感情・行動の側面と、家族・環境との相互作用を踏まえた多面的な理解が必要である。

(2)

家族への支援としては、母親の否定的な見方を和らげるための心理教育が有効である。Aさんの行動が「怠け」ではなく、心理的な困難さの表れであることを理解してもらう必要がある。また、父親の無関心に対しては、家族面接などを通じて関与を促すことが考えられる。家族全体のコミュニケーションを改善し、Aさんが安心できる家庭環境を整えることが支援の目標となる。

問2.

<出題意図>

公認心理師法第41条では、「公認心理師は、正当な理由なく、その業務に関して知り得た人の秘密を漏らすてはならない」と規定されており、一般社団法人日本臨床心理士会倫理綱領の第2条においても秘密保持が定められている。守秘義務は、クライアントが安心して相談できる関係を保障し、適切な心理支援を行うための基本原則である。ただし、守秘義務は絶対ではなく、クライアント本人の同意がある場合や、法令に基づく場合、生命・身体に重大な危険性がある場合に守秘義務が解除され、情報提供が認められることがある。心理支援において、守秘義務は単なる秘密保持ではなく、クライアントの権利と信頼関係を守るための専門職倫理の中核といえる。大学院では、公認心理師および臨床心理士養成に関わる学内実習・学外実習を行う。そこでクライアントや様々な職種・関係者と関わるうえで、守秘義務の理解や対応が重要となる。その理解度を把握することが出題の意図である。

<解答・解答例>

(1)

A、B、D

「解説」Cが不適切。たとえ家族であってもクライアントの情報を自動的に開示してはならない。基本原則は本人の同意（インフォームド・コンセント）と守秘義務が優先される。

(2)

この問題は正答が一義的ではないため、具体的な解答例は提示しない。

問 1. 帰納的科学研究と演繹的科学研究とについて、その概要を例をあげて論じるとともに、両研究の関係について論じなさい。

(出題意図)

解答例のような実験研究に限らず、科学研究の基本的な思考法について、適切な理解を持っているかを確認する。

(解答例)

他の摂食の条件がほぼ同じであるにもかかわらず、特定のある食物 A を摂取している人でのみ食後血糖値の上昇が緩やかであった。このことから、A を摂取することが食後血糖値の上昇を抑制するのではないかと仮説を立て、A を日常的に摂取するグループと摂取しないグループとの食後血糖値を測定したところ、A を日常的に摂取するグループの食後血糖値が摂取しないグループに比べ、有意に低かった。この検証過程が帰納的科学研究の手続きに該当する。

上記の結果に基づき、A が食後血糖値の上昇を抑制する効果を有するとの仮説に基づき、全く同じ食品を同じ時間に摂取する条件を設定し、A を摂取しないグループ、A を他の食品と同時に摂取するグループ、A と形状が類似した、全く栄養を含まない人工的食品を他の食品と同時に摂取するグループとを設定し、食後血糖値を 3 被験者グループ間で比較検討する実験を計画し、実施した。この検証過程が演繹的科学研究の手続きに該当する。

科学的研究においては、帰納法により仮説を立て、演繹法による仮説検証を行う、を 1 セットとして実施しなければ、妥当性の高い研究は実施できない。

〈採点基準〉

以下の各項目について適切に論じられていること。

- ① 適切な事例。
- ② 「帰納的科学研究」が、現象や結果から、その原因・要因、メカニズムについて推論を研究することであり、それに基づいて、科学的仮説が導かれるのであること。
- ③ 「演繹的科学研究」が、仮説に基づいて、仮説検証のための実験・調査を実施し、仮説検証結に基づいて、現象の原因・要因、メカニズムを実証しようとする研究であること。
- ④ 「帰納的科学研究」と「演繹的科学研究」とが 1 セットとなって、科学研究の妥当性が決定されること。

問 2. 測定における実験者効果について具体的に例をあげて論じなさい。

(出題意図)

人を対象とした実験、調査、面接の各方法が内包している、データを歪める可能性のある要因について、適切な理解を持っているかを確認する。

(解答例と採点基準)

以下の各項目について適切に論じられていること。

- ① それぞれの適切な具体例
- ② 研究パラダイム効果
- ③ 実験計画効果：単純な実験計画は単純な結果を導きやすく、複雑な実験計画は複雑な結果を導きやすい。
- ④ 個人属性：生物学的な属性、社会的属性（服装なども含む）。
- ⑤ ルーズな手続きの効果
- ⑥ 記録ミス効果
- ⑦ データ操作効果：捏造、一部の捏造、手続きの省略。
- ⑧ 尺度構成や質問項目の配置や文言
- ⑨ 無意図的期待効果：いわゆる「賢いハンス」や「ピグマリオン」効果など

問 1. レヴィン (Lewin) は、個人の社会的行動を $B = f(P, E)$ と関数表記で図式化した。この図式が意味することを、簡潔に説明しなさい。ただし、 B 、 P 、 E が表すものについては日本語で表記すること。

① 出題意図

レヴィンの行動図式について正しく理解しているか。

② 解答例

人物 X の行動 (B) は、X 自身の人格等の人的要因 (P) と、他者の行動を含む状況的要因 (E) の関数で決まる。

問 2. 次の 3 つについて、それぞれ援助行動の抑制にどのように影響するか、簡潔に説明しなさい。

- (1) 傍観者効果
- (2) 非援助コスト
- (3) 原因の帰属 (統制の所在について)

① 出題意図

援助行動に関連する専門用語を適切に理解し、援助行動の抑制について説明できるか。

② 解答例

(1) 周囲にいる人の数が多いほど、援助は抑制されやすい

(2) 援助しないことによるコストが予想されない場合、援助は抑制されやすい

(3) 統制の所在が内的である場合、援助は抑制されやすい

問3. 自己呈示行動に関する以下の設問に答えなさい。

- (1) 自己呈示行動の一つに、セルフ・ハンディキャッピングと呼ばれるものがある。セルフ・ハンディキャッピングとはどのような行動パターンであるか説明しなさい。
- (2) テダスキとノーマン (Tedeschi & Norman) は、自己呈示行動を2つの次元に基づいて分類している。この2つの次元を示す用語を、次元ごとに記述しなさい。
- (3) セルフ・ハンディキャッピングについて、テダスキらの2次元の分類に基づいて説明しなさい。

① 出題意図

自己呈示行動に関する基本的知識を有しているか。また、「セルフ・ハンディキャッピング」について専門用語として適切に理解し説明できるか。

② 解答例

(1)	自分にとって重要な何らかの特性が評価の対象になる可能性があり、かつ、そこで高い評価を受けられるかどうか確信をもてない場合、遂行を妨害する不利な条件を自ら作りだしたり、不利な条件の存在を他者に主張したりすること。
-----	---

(2)	戦術的 — 戦略的 (Tactical) (Strategic)	防衛的 — 主張的 (Defensive) (Assertive)
-----	-------------------------------------	--------------------------------------

(3)	特定の対人場面で一時的に行う戦術的で、自分のイメージをそれ以上に傷つけないようにする防衛的なもの。
-----	---

問1. 人間性心理学について説明しなさい。

① 出題意図

臨床心理学および心理療法における重要理論である「クライエント中心療法」とその背景となる「人間性心理学」についての体系的な理解を問うため。この意図は、問2についても同様である。

② 解答例

解答に下記の内容が含まれているものとする。

- ・ 生きた全体としての人間探求を志向しようとする心理学の一潮流のこと
- ・ 人間らしさを追求し、人間を理解し、人間の成長と可能性と尊厳を重視して現象学的な見方を重視する立場のこと

《採点基準》

- ・ 人間の成長的側面（可能性）を重視する立場であるという言及がある
- ・ 当時（1950年代）の主流であった精神分析や行動主義による、人間の捉え方（無意識の支配から逃れられないという悲観的な見方、病的で否定的な側面を重視する姿勢、刺激に対して反応するというような生理的・機械的な見方）に対して、人間のより健康的で肯定的な側面を探求するために提唱された、という経緯についての言及がある
- ・ 代表的な心理学者の言及がある
- ・ その他、上記以外の「人間性心理学」についての記述は内容の正誤によって加点する

問2. ロジャーズ (Rogers, C. R.) によって創始されたクライエント中心療法に関する以下の問題に回答しなさい。

(1) ロジャーズは、何らかの心の苦悩や苦痛に対して治療を求める者たちを表す用語として、それまで一般的な呼称であった「患者」ではなく「クライエント」を使用しはじめた。この「クライエント」の意味を記述しなさい。

① 出題意図

臨床心理学および心理療法における重要理論である「クライエント中心療法」とその背景となる「人間性心理学」についての体系的な理解を問うため。以下、問2の各設問についても同様である。

② 解答例

自発的に援助を受ける人

《採点基準》

- ・ 来談者という日本語訳だけでなく「自発的に援助を受ける人」というクライエント側の主体性について言及している

(2) 「患者」ではなく「クライアント」という用語を使用しはじめた理由を説明しなさい。

① 解答例

当時一般的だった、「治療者が患者に一方的に示唆を与える」というやり方では、クライアント自身が自ら問題を解決する力を奪うと考え、「意思決定を行い、問題解決に立ち向かうのはその人本人」であるという信念のもと、「クライアント」と用語を使い始めた。

《採点基準》

- ・ クライアントの主体性について言及している
- ・ 従来の「治療者が一方的に示唆を与える」という関係性との対比について説明している

(3) ロジャーズは、クライアントに治療的人格変化をもたらすためのカウンセラーの本質的態度のひとつとして共感的理解をあげた。この共感的理解について説明しなさい。

① 解答例

定義：あたかもその人のように、でも「あたかも」という感覚を決して失わずに、正確にそして、感情的な構成要素と意味をもって他者の内的照合枠を正確に経験すること。

(その後の定義の変遷を反映した、プロレスとしての共感に関する記述を含む場合も可とする)

《採点基準》

- ・ 相手のおかれた状況や心境について、実感を伴った形で理解している(感覚的作業), という点に言及している
- ・ 共感的理解が、クライアントの内的世界を感じるとともに、知的にも理解する必要がある(知的作業), という点に言及している
- ・ 「あたかも」(自分の体験とは異なるという自覚) という点に言及している
- ・ カウンセラー側が共感的に理解をしようとしている, またはしていることがクライアントに最低限伝わっている, という点に言及している
- ・ その他, 上記以外の「共感的理解」についての記述は内容の正誤によって加点する
- ・ 共感的理解の中核的なポイントである「あたかも」というカウンセラーの自覚の部分に言及していない場合, 減点とする

《参考文献》

角田豊 (2010). [5-2]共感. 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編). 心理臨床大事典 改訂版 (第7版). 培風館, pp.211-213.

小林孝雄 (2004). 「状態」としての共感的理解の定義を再考する——ロジャーズの記述の比較検討——. 人間科学研究, 26, 67-75.

三国牧子 (2015). 基礎編 共感的理解をとおして. 野島一彦 (監修). 三国牧子・本山智敬・坂中正義 (編著). ロジャーズの中核三条件<共感的理解> カウンセリングの本質を考える3. 創元社, pp.4-20.

Rogers, C. R. (1957) The Necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of consulting Psychology*, 21, 95-103.

近田輝行 (2015). 発展・実践編 プロセスとしての共感的理解——インタラクティブ・フォーカシングで身につける——. 野島一彦 (監修). 三国牧子・本山智敬・坂中正義 (編著). ロジャーズの中核三条件<共感的理解> カウンセリングの本質を考える3. 創元社, pp.22-30.

吉福伸逸・岡野守也 (2010). 8. トランスパーソナル心理学. 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編). 心理臨床大事典 改訂版 (第7版). 培風館, pp. 75-79.

【出題意図】

アドミッション・ポリシーに基づき、本専修における学修に必要な基礎知識および論理的思考力を評価することを目的として出題しました。

【解答例】

この問題は正答が一義的ではなく、受験者の考えを論述させる問題であることから、解答例等の提示はしておりません。

出題意図

博士後期課程での学修において求められる、英語で記された論文を理解できるかを問うものである。単に英語という言葉の理解度を測るのみならず、英語で記された科学論文に対して、研究デザインや方法の限界を指摘できるかなど批判的読解力を問うものである。

解答例

問 1

SDOH Social Determinants of Health 健康の社会的決定要因

HRSN Health-Related Social Needs 健康に関連する社会的ニーズ

問 2

BRFSS に新たに設けられた「社会的決定要因と健康公平性 (SD/HE)」モジュールのデータを用いて、米国における人種・民族別の有害な健康の社会的決定要因 (SDOH) および健康に関連する社会的ニーズ (HRSN) を初めて検討した。

問 3

この知見は、米国の人種・民族集団の健康の社会的決定要因 (SDOH) および健康に関連する社会的ニーズ (HRSN) に対して、社会的・構造的・制度的基盤が不均等な影響を与えているという事実と一致している。

問 4

1. 自己申告によるデータに依存している

BRFSS はすべて自己回答式の電話調査であることから、社会的に望ましいと思われる回答が選ばれやすい事や、曖昧な記憶に基づいて回答を選択している可能性がある。

2. 横断研究設計による因果推論の限界がある

本研究は横断研究であるため、社会的決定要因 (SDOH) や健康に関連する社会的ニーズ (HRSN) と健康アウトカム間の因果関係を示すことはできない。

3. 調査対象の代表性に限界がある

BRFSS は固定電話や携帯電話を利用した調査であり、貧困層が調査対象に含まれていない可能性がある。また、SD/HE モジュールの調査を実施したのはすべての州ではなく、全米を完全に代表しているとはいえない。

問 5

米国成人における健康の社会的決定要因および健康に関連する社会的ニーズの人種・民族差—米国 2022 年行動リスク因子サーベイランスシステムを用いた分析